

民俗文化

第32号 近畿大学民俗学研究所

2020-10

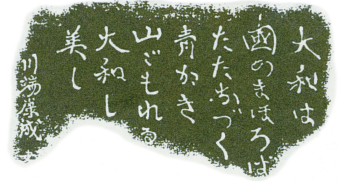


民俗文化

第三十二号



① 大和三山 左から天香久山、畝傍山、耳成山、大神神社の大鳥居、二上山を望む。この中を直線道路の横大路（伊勢街道）、上ツ道、中ツ道、下ツ道（中街道）が縦横に走り、その沿道に町場や村が発展した。



万葉歌碑拓本



② 明日香村八釣の集落 遠く畝傍山と二上山を望む 中央の大和棟の民家の竈屋の鬼瓦に③の銘文がある。



③ 文化9年(1812)奥山村の瓦屋太七と「作人(細工人)政七」作の鬼瓦 打出の小槌



④ 横大路を東へ、山中の長谷寺に至る 国宝長谷寺本堂（奥の正堂と手前の礼堂）と重要文化財の鐘楼・登廊が周囲の緑にとけこむ。本堂は徳川家光の寄進を得て正保2年(1645)に着工し、5年後の慶安3年(1650)に完成した。入母屋造りの正堂の屋根に、懸造りの礼堂が取り付き、複雑な屋根構造をみせる。



⑥ 正堂大棟東の鬼瓦 別作りの本体と脚を帯金で固定する。



⑤ 登廊が取り付く鐘楼の屋根も入母屋造りで、大棟と隅棟、降り棟、妻降り棟に、慶安2年(1649)、大坂四天王寺住の寺島家一門作の18個の鬼瓦が残る。徳川家の御用瓦師であった寺島家は大規模な造営に対応するため、大坂と京都に分かれていたが、本堂大棟の東西の鬼瓦には慶安元年(1648)銘があり、西には大坂寺島家の三右衛門、東には京都寺島家の井上善兵衛の銘があるので、本堂の大量の瓦は両家が協力分担して作ったと思われる。



⑦ 鐘楼大棟西の鬼瓦 額に蓮華座付の梵字、脚に雲紋を飾る。



⑧ 横大路を西へ、二上山麓の当麻寺に至る 重要文化財の奥院鐘楼門近くから国宝の東西両塔を望む。当麻曼荼羅で知られたこの寺の創建は7世紀末に遡り、多くの建造物・仏像が国宝や重要文化財に指定されている。境内の諸堂には、五井村の佐兵衛や大路堂村（曾我村）の佐兵衛、万歳村の池ノ上八兵衛などが作った、江戸時代初期の鬼瓦が多数残されている。



⑨ 奥院鐘楼門 入母屋造りの屋根に10個の鬼瓦



⑩ 同大棟鬼瓦 正保4年(1647)五井村佐兵衛作



⑪ 大師堂前の鐘楼 棧瓦葺きだが鬼瓦は古い。



⑫ 鐘楼鬼瓦 万治2年(1659)大路堂村佐兵衛作



⑬ 今西家大棟の鬼瓦 左鬼面紋、右宝囊紋。



⑭ 復元された環濠に映る今西家八棟造りの屋根



⑮ 大棟の鬼面紋鬼瓦 脇区と脚に木葉紋を飾る。



⑯ 重要文化財 今西家住宅（北西から）慶安3年（1650）



⑰ 大棟の宝囊紋鬼瓦 脇区と脚に桃と枝葉を飾る。



⑰ 重要文化財 豊田家住宅（南東から）寛文2年（1662）



⑱ 豊田家 南西隅棟の大黒天 寛文2年（1662）脇区に八双金物形と吹き流し状のヒレをあらわす。



⑳ 横大路と下ツ道の交差点「札の辻」右が旅籠の旧平田家（19世紀前半）



㉑ 旧十市郡池尻村（榎原市東池尻町）煙出しと鳥衾が目立つ杉本家



㉒ 山深い明日香村入谷 昔、荷物はすべて人間が担いで村まで運んだ。



㉓ 「札ノ辻」東の平田家の亀の鬼瓦「箸新」刻印（箸喰村 新七）



㉔ 杉本家鬼瓦 文化15年（1818）横内 伊兵衛作



㉕ 入谷の家紋鬼瓦 弘化4年（1847）常門村 新兵衛作



㉖ 入谷の地藏寺鬼瓦 弘化2年（1845）常門村 利兵衛作



⑳ 桜井市初瀬の万福寺 享保19年(1734)銘の鯨や鬼瓦が多数残る。鯨は三輪の瓦屋佐平次、鬼瓦は三輪の谷本五郎右衛門作。背面は棧瓦葺きに改修され、大棟には羊歯類や木が生えている。



㉘ 無住となって久しく、このままでは崩壊を待つばかり。地元には加賀藩主前田利家とまつの間にも生まれた姫君に関連する伝承が残る。



㉙ 西の鯨と鬼瓦 額に経巻



㉚ 東の鯨と鬼瓦 額に頭巾 図56・62・63を参照。



㉛ 火灯窓が優美な三間堂 屋根は寄棟造りで10個の鬼瓦が残る。



㉜ 長谷寺への道から北へ入ると寺が見えてくる。



③③ 桜井市池之内の稚桜神社 本文5頁参照のこと



③④ 旧十市村（檀原市十市町）から譲られた太鼓台
稚桜神社は今回の調査のきっかけになった場所。
本殿の前には7世紀代の石灯笼の中台があり、「雷
おさえの石」と伝えられている。また入り口制札横の
石材は古代寺院址の唐居敷らしい。祓戸の奥にある
太鼓台庫の無銘の鬼瓦は18世紀中頃のもので、新ノ
口村（檀原市新口町）の瓦屋、相田傳兵衛の作品と
の共通点が多い。昭和4年頃には、この太鼓台の前
後を村人32人で担ぎ、桜井駅まで練り歩いたという。



③⑤ 祓戸と太鼓台庫 建物に比して不釣合な大き
さの鬼瓦が睨みを利かせる。



③⑥ 祓戸の鬼瓦 文化2年（1805）
戎重村 彌七郎作



③⑦ 太鼓台庫東の鬼瓦



③⑧ 太鼓台庫西の鬼瓦



③⑨ 唐居敷の軸摺穴



④⑩ 制札前の唐居敷



④① 「雷おさえの石」下の石が凝灰
岩製の中台で蓮弁が残る。



④② 明日香村栢森 龍福寺庚申堂の青面金剛像



④③ 同庚申堂の三猿鬼瓦 常門村 新兵衛作

庚申信仰と三猿

庚申は青面金剛の別称である。青面金剛は顔の色が青い金剛童子で、病魔・病鬼を払い除くと信じられ、庶民によって多くの庚申堂が建てられた。「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿のモチーフは、庚申信仰とともに近世以降広まり、庚申堂に様々な三猿が飾られた。

初瀬は宿場としても栄え、多くの本陣があった。「胡麻屋」もそのひとつで、初瀬崇蓮寺境内の三猿の鬼瓦は、胡麻屋りゑの寄進したものと思われる。



④④ 「聞か猿」葛城市北花内 浄円寺境内



④⑤ 桜井市初瀬 崇蓮寺の庚申堂 三猿の鬼瓦



④⑥ 「胡麻屋」 ④⑦ 「りゑ敬白」 銘はいずれも後刻



④⑧ 庚申堂大棟西の「聞か猿」猿股が可愛い 19世紀前半



④⑨ 堂内の青面金剛 ④⑩ 同「三猿」を刻む



⑤1 鹿に乗り桃を持つ猿 榎原市高殿町の民家



⑤2 御幣猿の留蓋 明日香村祝戸の民家 嘉永5年(1852)頃



⑤3 御幣を担ぐ猿 今井町春日神社絵馬堂大棟西



⑤4 見上げる猿 左手に桃 葛城市新在家 明圓寺



⑤5 御幣と巫女鈴を担ぐ猿 春日神社絵馬堂大棟東



⑤6 母猿の背中にしがみ付こうとする子猿



⑤7 今井町春日神社絵馬堂 御幣猿の鬼瓦が載る

鹿に乗る猿と御幣猿

屋根には三猿以外にも様々な猿がいる。鹿に乗る猿は、屋久島をはじめ各地でみられ、『鳥獣人物戯画』や『年中行事絵巻』にも登場するが、この猿は手に枝葉のついた桃を持つところに意味が込められているのであろう。⑤4の塀の隅から遠くを眺める猿も左手に桃を持つ。

「御幣猿」もあちこちに残り、春日神社絵馬堂東の猿は、御幣と巫女鈴を担ぐ。留蓋として作られた親子の猿は、あどけない子猿の一瞬の表情を巧みにとらえている(大和高田市の某寺境内)。



⑤⑧ 吉井傳兵衛作 今井町旧杉本家の桃の鬼瓦
寛永21年(1644)



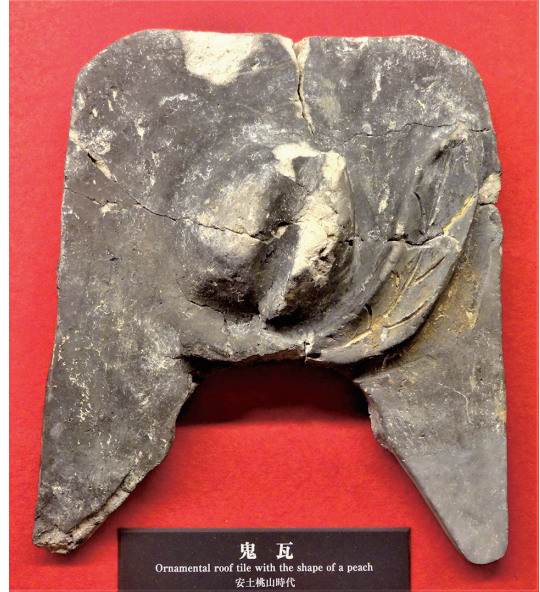
⑤⑨ 桜井市戒重西方寺の桃の鬼瓦 常門村 新兵衛作



⑥① 雲梯村小兵衛作 宝永8年(1711) 榎原市一町 浄念寺境内



⑥② ⑥①と酷似する桃の鬼瓦 大和高田市専修院



⑥③ 有馬温泉「ゆの山御てん」出土の桃の鬼瓦

桃の鬼瓦

桃は古くから邪気を払う力があるとされ、また不老長寿のシンボルともされた。16世紀末に鬼瓦の意匠に用いられ、「ゆの山御てん」出土例(1594～98年)や姫路城例(1580～1617年)、民家では旧杉本家例がその早い例である。桃はとりわけ僻邪の力が強いとされ、建物の「長」(北東)の方角に鬼門除けとしてのせた。今西家には、鬼面紋と桃・分銅・宝囊の4種類の鬼瓦が使われている。桃は主屋の南西隅棟と西妻の南の降り棟にあり、裏鬼門(坤)を護った。



⑥③ 今井町今西家の南西隅棟を飾る桃の鬼瓦 慶安3年(1650)



⑥4 耳まで完全な兎 榎原市南浦町の民家 19世紀中頃



⑥5 子兎を肩車する鬼瓦 桜井市初瀬の民家



⑥6 波乗り兎の鬼瓦 広陵町広瀬の福德寺表門 19世紀後半



⑥7 大棟北には波乗り鯛がセットとなり鯨を支える



⑥8 兎の形が桃のよう 大和高田市野口 西蓮寺



⑥9 築地塀の角を護る兎 桜井市橋本の民家 19世紀後半



⑦0 桜井市池之内 稚桜神社拝殿入口上の波乗り兎



⑦1 広陵町中 徳浄寺の欄間透かし彫り

兎の鬼瓦

波に兎の意匠には「火伏せ」の効果があり、建物を火災から護ると信じられた。なぜなら、兎は月で餅を搗く。月は陰の象徴で太陽の陽と対比され、水と縁があり、波と兎の様々な造形が火伏せのために作られたのである。なお小兎を肩車した⑥5は、子孫繁栄、一家円満を併せて祈ったものか。⑥4には「奥治」、⑥7には「百済瓦師藤村武兵衛」の銘がある。「奥治」は、天保12年(1841)から安政3年(1856)までの銘文を残す奥山村の治兵衛と思われる。⑦0と⑦1は社寺の入口上の波乗り兎。⑦0は明治12年(1879)再建の拝殿。⑦1は江戸後期か。



⑦② 鍾馗の鬼瓦は珍しい 桜井市三輪 心念寺北の民家



⑦③ 平瓦で目隠しされた鬼瓦 桜井市初瀬 法起院



⑦④ 小鬼を懲らしめる鍾馗像 榎原市八木町の民家



⑦⑤ 鍾馗の鬼瓦 香芝市鎌田 寂照寺北の民家 19世紀中頃



⑦⑥ 柄杓をもって踊る猩々 桜井市下の造り酒屋 19世紀後半



⑦⑦ 鍾馗像 今井町称念寺北の民家

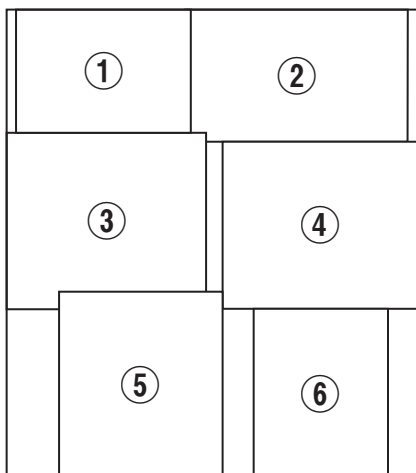


⑦⑧ 猩々 榎原市十市町の民家 酒壺と柄杓・盃 19世紀後半

しょうき しょうじょう 鍾馗と猩々

鍾馗の鬼瓦は、疫鬼を退けるというので、民家の屋根から寺の鬼瓦を睨み返す。近年は⑦⑦のような鍾馗像が増加中。⑦③の法起院の鬼瓦は、東の山中に鎮座する与喜天満宮の神威を恐れ、敬意を表したものである。

⑦⑧の猩々を見つけた時は、その風貌が老女のように思え、何者かわからなかった。また⑦⑥は、造り酒屋の主人が「火消し」と誤解していた。猩々は七福神の鬼瓦が流行した19世紀中頃以降、寿老人の代わりに取り入れられたものと思われる。



表紙

- ① 自家製の柿の葉寿司
(和歌山県橋本市、2016年8月、藤井撮影)
- ② 紀ノ川
(和歌山県橋本市高野口町・九度山町の間、2007年3月、藤井撮影)
- ③ 笹野観音地藏堂に残る相良人形の千躰地藏
(山形県米沢市、2019年11月、網撮影)
- ④ 上杉家廟所
(山形県米沢市、2019年11月、網撮影)
- ⑤ 無縁仏の棚
(和歌山県橋本市、2016年8月、藤井撮影)
- ⑥ 鶴渡川原人形伝承の会が制作・寄贈した「清正公虎退治」の土人形
(山形県鶴岡市致道博物館、2019年11月、網撮影)

表紙

口絵写真 大和三山地域の鬼瓦 大脇 潔

目次

近畿の民俗・文化

やまと・まほろば・葺紀行 大脇 潔 1

―三山地域における近世鬼瓦の変遷― 第二部

天王寺公園のラジオ塔 人見 佐知子 49

和歌山県橋本市の盆棚 藤井 弘章 65

遺され村の美術展 鈴木 伸二 121

―インタビュ―を中心に―

越前国における明智光秀伝承の創出 新谷 和之 189

―東大味館（明智館）を事例に―

出羽に継承された二つの土人形 網 伸也 207

―相良人形と鶴渡川原人形に関する覚書―

史料紹介 奉願上候口上覚(旧八塚家文書)

二〇一九年度演習 I A 受講生・

新谷和之

223

書評と紹介

野本寛一著 『生きものの民俗誌』

辻 貴志

229

伊藤廣之著 『河川漁撈の環境民俗学 淀川のフィールドから』

俵 和馬

233

付録

民俗学研究所第三一回公開講演会(講演要旨)

東大阪の戦争遺跡から戦争と平和を考える

大 西 進

238

東大阪市や周辺の身近な戦争遺跡から考えよう

太 田 理

241

沖縄県八重山郡小浜島の民俗植物学

辻 貴志

298(1)

執筆者紹介

投稿規程

編集後記

299

301

302

近畿の民俗・文化

執筆者紹介（五十音順）

網伸也（あみ のぶや）

一九六三年、大阪府生まれ。近畿大学文芸学部教授、同民俗学研究所所長。『平安京造営と古代律令国家』（塙書房、二〇一一年）、『経塚考古学論攷』（共著、岩田書院、二〇一二年）、『仁明朝史の研究―承和転換期とその周辺―』（共著、思文閣出版、二〇一二年）、『シリーズ古代史をひらく 古代の都』（共著、岩波書店、二〇一九年）、『古代寺院史の研究』（共著、思文閣書店、二〇一九年）、など。

太田理（おおた おさむ）

一九四四年、大阪市生まれ。河内の戦争遺跡を語る会共同代表、摂河泉地域文化研究所理事。『かたりべ たてつの飛行場』（わかくす文芸研究会、二〇〇〇年）、『大和と河内の田原の民俗』（『わかくす』わかくす文芸研究会、二〇〇〇年）、『盾津飛行場―笹川良一と民間の防空』（『大阪春秋』一六三号、二〇一六年）、『盾津中学校はかつて飛行場だった―盾津飛行場の探求―』（『地域と軍隊』、二〇一九年）、『田原の歴史と民俗―河内と大和に属す』（『大阪春秋』一七八号、二〇二〇年）など。

大西進（おおにし すずむ）

一九四〇年、大阪府八尾市生まれ。河内の戦争遺跡を語る会代表、元「河内どんこう」編集委員、やお観光ボランティアガイドの会理事。『日常の中の戦

争遺跡』（アットワークス、二〇二二年）、『戦争の記憶』（八尾市文化国際課、二〇一四年）、『地域と軍隊』（共著、山本書院、二〇一九年）、『大阪春秋 一六三 軍都おおさか』（共著、二〇一六年）など。

大脇潔（おおわき きよし）

一九四七年、名古屋生まれ。フリーランスアルケオロジスト、元近畿大学文芸学部教授、民俗学研究所第三代所長。「みちのく豊紀行―宮城・福島県の被災地を歩いて―」（『民俗文化』二五、二〇一三年）、『七世紀の瓦生産―花組・星組から荒坂組まで―』（『古代』一四一、早稲田大学考古学会、二〇一八年）、『堂内荘厳の考古学―緑釉波紋埴と埴仏から―』（『古代寺院史の研究』共著、思文閣出版、二〇一九年）、など。

新谷和之（しんや かずゆき）

一九八五年、和歌山県生まれ。近畿大学文芸学部講師、同民俗学研究所所員。『戦国期六角氏権力と地域社会』（思文閣出版、二〇一八年）、『戦国時代の大名と国衆』（共著、戎光祥出版、二〇一八年）、『近江六角氏』（編著、戎光祥出版、二〇一五年）、『成立期和歌山城の政治的意義―豊臣政権の「統一」事業との関わりから―』（『研究紀要』二八、和歌山市立博物館、二〇一三年）、など。

鈴木伸二

大阪府に生まれる。近畿大学総合社会学部准教授・同民俗学研究所所員。「中世の開発フロンティア・葛川の民族誌」(『民俗文化』(30)二〇一八年)、『生態資源・モノ・場・ヒトを生かす世界』(共著、昭和堂、二〇一八年)、「マングローブ湿地のシンプリファイケーション」(『近畿大学総合社会学部紀要』4(1)二〇一五年)ほか。

俵和馬(たわら かずま)

一九九一年、兵庫県豊岡市生まれ。大阪歴史博物館学芸員。「和歌山県紀美野町における動物の民俗」(『民俗文化』二九、二〇一七年)、「8mmフィルム「天然記念物 但馬名勝 出石鶴山」撮影の背景―出石鶴山の歴史と映像の意義―」(『大阪歴史博物館研究紀要』一八、二〇二〇年)、『大阪歴史博物館館蔵資料集 一六 小絵馬 中コレクション・柴垣コレクション』(執筆・編集、二〇二〇年)など。

辻貴志(つじ たかし)

一九七三年、大阪府生まれ。近畿大学経営学部非常勤講師、佐賀大学大学院農学研究科特定研究員。An Eco-Material Cultural Study on Bird Traps among the Palawan of the Philippines. *Naditira Widya* 111(1) (2019年)『An Ethnography on the Wedge Sea Hare in Mactan Island, the Philippines. *Naditira Widya* 111(1) (2019年)』 Gathering the Internal Organs of Wedge Sea Hare (*Dolabella auricularia*): A Case in Mactan Island, the Philippines. *People and Culture in Oceania* 115 (2020年) ほか。

人見佐知子(ひとみ さちこ)

兵庫県生まれ。近畿大学文学部教員、同民俗学研究所所員。『近代公娼制度の社会的研究』(日本経済評論社、二〇一五年)、『第4次現代歴史学の成果と課題3歴史実践の現在』(共著、績文堂出版、二〇一七年)、「戦争の子ども」からオーラル・ヒストリーを考える」(『日本オーラル・ヒストリー研究』一四、二〇一八年)など。

藤井弘章(ふじい ひろあき)

一九六九年、和歌山市生まれ。近畿大学文学部教授、同民俗学研究所所員。『高野町史 民俗編』(共著、高野町、二〇一二年)、『高野山納骨習俗の地域差―和歌山県北部を中心に―』(『民俗文化』二九、二〇一七年)、『日本の食文化 4 魚と肉』(編著、吉川弘文館、二〇一九年)、『三和インセクティサイド 50年のあゆみ』(編著、三和インセクティサイド、二〇一九年)、など。

民俗文化 投稿規程 (令和二年十月)

- 一、投稿できる者は、近畿大学民俗学研究所々員および同所員より推薦を受けた者とする。
- 二、受け付けた原稿は複数の査読者による査読を受ける。その結果にもとづき、掲載の可否を決定する。論部の内容に不備がある場合には、編集委員から投稿者に修正を求める。
- 三、刷り上がりは、A四判・縦書き(必要な場合は横書きも可)、一ページあたり三十五字×十九行×二段を原則とする。原稿執筆にあたっては、できる限り、刷り上がりに合わせて字数設定を行うものとする。
- 四、投稿の締切日は、毎年五月末日とする。原稿は、原則として、電子記憶媒体(CD等)を添えて編集委員に提出する。
- 五、別刷は五十部を無料とする。
- 六、刊行後の報文(論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等)は、その著作権が近畿大学民俗学研究所に帰属する。ただし、著作者本人による転載等をさまたげるものではない。
- 七、刊行後の報文(論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等)は、冊子体以外の媒体(近畿大学学術情報リポジトリ等)で公開されることを承諾のうえ投稿すること。ただし、電子媒体での公開に際しては、著作者本人もしくは話者の意向等により、一部または全部を非公開とすることがある。

近畿大学民俗学研究所

編集後記

令和二年（二〇二〇）は新型コロナウイルスの感染拡大によって、世界中で今までとは大きく異なる生活スタイルを模索しなければならなくなった。近畿大学の授業もさまざまな工夫をしながらオンライン授業（後期は一部対面授業）をおこなっている。一方で、民俗学研究所としては、昨年からの計画していた一二月のシンポジウムの延期を判断した。また、調査自体も地域や話者への配慮から、自粛しなければならぬ状態となり、延期・縮小してきた。民俗学を中心とした当研究所の現地調査としては、ご高齢の方に接触する場合も多いことから、最大限に話者への配慮を考えなければならぬと感じている。しかしながら、地元のほうが招かれる場合などについては、十分な感染対策をしながら、夏以降に一部の調査を再開しつつある。このように、新規調査や補充調査が十分におこなえない状況ではあるが、所員がこれまでに蓄積してきた調査データをもとにして論考をまとめ、「近畿の民俗・文化」特集という形で、『民俗文化』三三二号を刊行することになった。所員以外に、元所長の大脇潔氏、経営学部非常勤講師の辻貴志氏、大阪歴史博物館の俵和馬氏にも論考や書評をいただいた。結果として、昨年度に劣らないボリュームの冊子とすることができた。

最後に、これまで当研究所の所員がお世話になってきた多くの方々の健康を心よりお祈り申し上げたい。一日も早く新型コロナウイルスの感染が収束し、民俗調査を通常モードで再開することができ、ご高齢の方々からお話をたくさん聞かえるようになることを切に願っている。

(H・F)

民 俗 文 化 第 32 号

令和 2 年 10 月 31 日印刷
令和 2 年 10 月 31 日発行

編集・発行者 近畿大学民俗学研究所

〒577-8502
東大阪市小若江3丁目4番1号
電 話 (06) 6721-2332

印 刷 所 近畿大学 管理部 用度課



近畿大学

KINDAI UNIVERSITY